



## 幼児の自らもつものを

— 保育の要訣 —

倉 橋 惣 三

保育の要訣が、幼児の自発によることは、今更めていうまでもなく、誰れも周知せるところである。しかも、自発の語義を、その普通行われている点において強調すれば、生活の活動が、他動を俟たずして、自ら発し来る力を主とする。自発力とさえいわれるのである。その自発活動力が、幼児において旺盛であり、すばらしい力であり、幼児保育に常に尊重されなくてはならぬとされる。というよりも、その力の方面に就て自発が貴ばれるのであるその点もとより、異論のあるべきでないが、自発の力に驚くと共に、自発する内容に就ても、屢々感嘆に値するものがある。勿論、実際の生活として、自発の力には常に内容があり、内容のない力はないといえる。しかし、自発する与否にかゝわらず、幼児のみづから生来にもつ性情そのもの、必ずしも充分に自発の力によつて外部生活とならないで、幼児の自らの本来性に潜在、内蔵されている貴い心、美しい心を見落されてはならない。そ

れは屢々、極めてかすかであり、瞬間的のものであり見るもの繊細微妙を以てして、多くは気づかれないものである。しかし、所謂、目ありて視るもの、耳ありて聴くもの、心ありて感ずる心の鋭敏、というよりも感受性のやわらかさ、受領性のすなおさをもつものには、見落されることなく印象せられるものである。

そのうちに、幼児の好意がある。幼児の親愛がある。幼児の喜悅がある。幼児の美に感ずる性がある。善を好む性がある。真を好む性がある。但し、こうならべあげると、折角の純な光を明るくし過ぎ、純な音をつよめ過ぎる拡大と誇張となり易いきらいがあるが、こゝでは、光も音も、あるかなきかのかすかかさにおいて、目にとめられ耳にとめられるありのままに止まらなくてはならない。幼児自らも、それと心づいていないものだし、況んや人に気づかれようとしなないものだし、人に知られるほどの外部活動をも伴わないことが多

い。従つて、外部活動としての自発をのみ取りあげることに慣れている先生方に注意されないのが常であつたりする。すなわち絶えず幼児の本来の中に潜んでいるこういう性情を発見することに慣れている先生方にだけしかその心にとまらな

い。保育は自ら育つ幼児を育てることである。自ら育つ力を誘導し指導してゆくことだといわれる。その誘導し指導するに當つては、幼児自らの力により、その力をもととし、その力を借りてゆかなくてはならぬと教えられる。その通りである。しかし、この教えに従うだけでは、導き方を教えられるだけで、どこへ誘導し、何に指導するかは、他動の領域であつて幼児自らのものによらないことにもなる。つまり、厳密に言葉を使えば、完全に純粹に自発によるのではないということにもなる。それだけでも実際としては、自発保育である。普通にいう自発保育はそれでよいであらう。しかし、もつと深い源からの自発保育は、幼児を力だけを自発するのではなく、誘導指導の内容的方向をも自らもつものとして、そこに源をおく自発保育でもあらせたい。

普通いうところの学習活動の面においては、学習活動の導きを自発に基かせるだけで、何を学習せしめるかは、他から与えられ、ところによつて誘導指導せられる。しかし人間活動の場合においては、どう誘導され、どう指導されることを望ましいかの内容も、幼児が自発するのである。すなわち、

自発の力による自発保育たるばかりでなく、自発の内容による自発保育であり得るし、又、そこまで、自発をさかのぼらせなくてはなるまい。

筆者は、こゝで、全般的な性善説を主張している訳でもない。しかし、幼児の自然の性情には、保育が目あてとするものを内容としていたことが少なくない。或は、幼児の性情にこそ、望ましい性情の内容が多くあることを見るのである。

性情の面においても、適切な指導は素より必要である。しかし、それは幼児のもたざるものを与えることだけでなく、幼児もてるものに基いて、即ちその自発するところによつて、指導してゆくべきことが多いであらう。

論として意をつくさないところが多いとも思うが、少くも、幼児は他から与えられることなくしては、望ましい自発の内容を自らもたないとはいえないのである。われらは、そこまで幼児の自発生活を尊重する。